

平河町通信

令和4年
11月1日号
第11号

発行
内外政治
研究G

習近平政権は今年か来年に台湾侵攻!? 中央軍事委員会も「台湾シフト」

中国共産党の習近平総書記（国家主席）が5年間の3期目政権をスタートさせました。

習総書記は台湾について、党大会の冒頭で「武力行使（の選択肢）を決して放棄しない」と明言。「祖国統一を完成する」とのみ規定されていた党規約に新たに「台湾独立に断固反対し食い止める」の文言を加えました。

今回の人事で見逃せないのが習総書記がトップ（主席）を務める中央軍事委員会の副主席。米国のペロシ下院議長は訪台時に、日本のEIZ（排他的経済水域）にミサイルを撃ち込むなど大規模軍事演習を企画した人物とされ、今回、党の要職を経ずに中国共産党中央政治局委員に抜擢された何衛東（か・えいとう）氏。

直前まで台湾や日本を管轄する人民解放軍の「東部戦区司令」だったこともあり、習総書記の「台湾シフト」とみられていいます。

バイデン政権「中国の核強化」にも強い懸念

こうした中、米国のバイデン政権は10月27日、国防政策の全般の指針である「国家防衛戦略（NDSS）」を公表。中国の動きを「安全保障への世界中で最も深刻な挑戦」と位置づけ、「核戦力見直し（NPR）」では、中国の核の急拡大に強い懸念を示しました。

また、米海軍作戦部長のマイケル・ギルデイ大將は同月19日、米シンクタンクのイベントで「過去20年間で分かったのは（中国は）約束したことは全て予告した時期よりも早く実行することだ」と述べ、台湾侵攻が2022年や2023年に起きる可能性を排除できないとの認識を示しました。

那覇市長選で明確になった共産主導 「オール沖縄」の崩壊

沖縄県の那覇市長選は10月23日に投票が行われ、自・公推薦の元副市長、知念覚（さとる）氏が、立民・共産など玉城デニー県政の与党が推す前県議の翁長雄治氏を1万票差で破りました。

前県議の翁長氏は元知事の故翁長雄志氏の息子で、9月の知事選で那覇市で2万5千票差をつけた玉城知事と連携しましたが、知名度で劣ると見られた知念氏に敗れました。「オール沖縄」は共産が主導権を握り、かつての翁長

県政を支えた企業ばかりか、城間幹子市長も見切りを付けて知念氏の応援に回るなど、もはや単なる「オール革新」でしかなくなったと言えます。

今回の選挙では若い世代が知念氏を、高齢者が翁長氏を支持するという結果も出ています。NHKの出口調査では、10・20代から50代までは知念氏が半数超の支持を集め、中でも30代は7割に及んでいます。対して60代と70代以上では翁長氏が6割の支持を集めました。

両陛下 沖縄ご訪問



写真提供: 天皇陛下奉迎パレード実行委員会

天皇皇后両陛下は10月22日からご一泊で、「美ら島おきなわ文化祭」（宜野湾市）の開会式出席のため、即位後初めて沖縄に行幸啓になりました。

初日は糸満市の国立沖縄戦没者墓苑で花束を供えられました。沿道では多くの市民が出迎え、那覇市の国際通りでは、子どもたちを含む約700人による奉迎の提灯行列が行われました。自衛隊の音楽隊を先頭に、提灯と日の丸の小旗を持つ人々の列が続きました。

朝日が隠した 「国賊」発言

「国賊」発言をした村上誠一郎衆院議員（愛媛2区）を自民党が処分したことについて、朝日新聞は「言論封じ懸念の声も」と報じました。しかし、その場には、発言を報じた時事通信だけでなく、朝日の記者もいて録音していました。朝日の姑息な態度を「デイリー新潮」が暴いています。

追悼演説

本舞台はこれから先の 将来にあつたはず

野田佳彦元首相が故安倍晋三元首相に対して行った10月25日の追悼演説は、首相経験者としての「矜持」を示す立派な演説でした。

途中、「あなたの政治人生の本舞台は、まだまだ、これから先の将来に在ったはずではなかったのですか」「耐え難き寂寥の念だけが胸を締め付けます」と故人が座っていた議場の席に呼びかけました。

■故安倍元首相に対する
追悼演説 R4/10/25

